

小学校外国語活動から中学校英語への段階的連結の工夫について

～コミュニケーションを重視した文法指導の試み～

豊見城市立伊良波中学校 波 照 間 永 樹

I テーマ設定の理由

小学校外国語活動の目標「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」に示されているように、小学校では、英語の歌やゲームなどの活動をとおして「聞くこと」「話すこと」に慣れ親しんできている。このような生徒たちに、中学校で行われてきた文法訳読法による教師主導型の文法導入や指導方法だけでは、英語に対する興味・関心（楽しさなど）を維持・継続させることは、難しくなっている。そこで中学校1学年を小学校外国語活動と中学校英語との接続期ととらえ、文字（アルファベット）の導入や文法指導を工夫・改善していくことで、「読むこと」「書くこと」も含んだ正確性を求められる中学校英語への段階的な連結を実現することができるのではないかと考えた。

本校では、本年度の新中学2年生対してアンケートを行った結果、「英語が好き、楽しい」「英語がまあ好き、楽しい」と答えた生徒が約90%に及んだ。これは、英語の歌やチャンツ、ゲーム、コミュニケーション活動を継続的に実施してきたからである。同時に、同学年の2クラスを抽出して、英語検定5級程度のテストを行った。その結果、平均72%と高い正答率を示した。しかし、並べ替えの問題は正答率60%となり小学校でよく使われるplay like以外の動詞を含む並べ替えでは50%とさらに下回った。このことから語順を含めた各文法項目における定着が不十分であることが推測された。

このアンケート結果とテスト分析から、「英語が好き・楽しい」という情意面の連結が円滑に行われたことがわかる。しかし、英語と日本語の大きな違いである基礎的な語順が50%の正答率になったことは、文法事項の定着が十分に図られていないことが考えられる。このことから、2年、3年と学年が進むにつれて、文法事項の定着が図られず、「わかった」「できた」などの達成感がえられずに、「英語が難しい」「英語がわからない」「英語は嫌いだ」という意識に結びついていくことが懸念される。

本研究では、小学校でのコミュニケーション重視の指導を踏まえて、文法の定着に結びつけられるコミュニケーションを重視した文法指導に取り組んでいく。中でも、意味あるコミュニケーションを通じた文法指導方法、フォーカス・オン・フォーム（後述）を取り入れることで文法事項などの定着を試みる。さらに、英語の語順を文法の大きな基礎と捉え、「語順という土台の上に様々な文法項目が存在する」という考えを基本とした。そこで、1学年での文法の基礎的な語順及び文法項目を理解・定着させることで、「わかった」「できた」などの達成感を与えることで段階的な知的面での連結も行えると考えた。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

コミュニケーションを重視した指導（フォーカス・オン・フォーム）を基にした「文法指導」を工夫し授業に意図的・計画的かつ継続的に取り入れることによって、生徒が目標文法項目に「気づき」「理解し」「活用」することで定着が図れると考える。

2 検証計画

事前調査で、1年生に対して中学校入学直後の学習状況の実態を把握する。方法としては、アンケートを行う。新2年生において平成23年度末（1学年修了時点）に行ったアンケート結果を分析・考察する。その両方の結果を基に計画を立て、教材を作成し、検証授業を10時間行う。検証授業では、フォーカス・オン・フォームを用いた文法導入のための素地づくりとして、生徒に「気づかせる」場面を多く設定し、生徒自ら重要項目に「気づく」という達成感を味わわせることに留意する。その後、デモンストレーション（聞く活動）やリーディング教材（読む活動）などの場面を利用し、目標文法項目にできるだけ自然な形で「気づかせる導入方法」やペアワークやグループワーク、インタビューテスト（話す・書く活動）など「気づいたことを使用させる」表現活動、などに取り組む。授業後のアンケートや事前・事後のテスト、ワークシートや自己評価表を通して検証する。

最終検証は本年度末（平成25年度末）のアンケート及びテスト分析においてなされる。本検証授業は、フォーカス・オン・フォームというコミュニケーションを重視した新しい文法指導の導入期と捉えている。すなわち、本検証授業はその途中過程であり、検証はこれからも続いていくことになる。

(1) 事前 調査	<ul style="list-style-type: none"> 調査内容：小学校外国語活動についての情意面（好き・嫌い）と認知面（触れてきた単語や表現など）の調査 調査方法：アンケート・インタビュー 実施時期：6月～7月上旬（その後、継続的な実施） 調査対象：豊見城市立伊良波中学校1年3組・4組 		
(2) 検証 授業	<p>検証の場面</p> <p>展開</p> <p>①デモンストレーション</p> <p>②リーディング</p> <p>③ペアワーク グループワーク</p> <p>④インタビューテスト</p>	<p>検証の観点</p> <p>① 小学校及び中学校でふれてきた表現を役立てながら、デモンストレーションをとおして目標文法事項に「気づく」ことができたか。</p> <p>② ①で「気づく」ことのできた文法事項を読みの中でも再確認にし、再度「気づく」ことができるか。</p> <p>③ 「気づく」ことの出来た目標文法項目の使用を基盤としたペアワークやグループワークで活動すれば、「気づき」が深まり定着につながったか。</p> <p>④ ALTや英語教師とのインタビューテストで目標文法項目を使って適切な受け答えができたか。</p>	<p>検証の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業観察 ワークシート 自己評価表 テスト
(3) 事後 調査	<ul style="list-style-type: none"> 事前（4月）と事後（7月）のアンケート分析の比較・考察 実験群（1年3組・4組）と統制群（1年5組・6組）との比較・考察 ワークシートと自己評価表の分析・考察 直後テストと遅延テストの実施 ※9月初旬に遅延テスト実施予定 		<ul style="list-style-type: none"> 授業後のアンケート テストの比較 自己評価表
<p>・コミュニケーションを重視した指導（フォーカス・オン・フォーム）を基にした文法指導を取り入れることで、目標文法項目に「気づき」その理解と定着に有効であったか。そして、このことが小学校外国語活動との段階的連結につながるか。</p>			<p>(1)(2)(3)の結果の分析・考察</p>

Ⅲ 研究内容

1 小学校外国語活動から中学校英語への段階的連結の工夫について

(1) 情意面からの連結の工夫（昨年度より引き続き継続）

中学校1学年において英語の歌やチャンツ、ゲーム、コミュニケーション活動を計画的に適宜取り入れていくことで徐々に「読むこと」「書くこと」に慣れさせる。

(2) 情意面の優位性を活かした認知面からの連結の工夫

① アルファベットの導入の工夫（※小中接続期の指導としては大切だが、本研究には含めない。）

アルファベットと音のつながり（フォニックス）を計画的に指導することで、新出単語・文を読もう、書こうとする態度を養う。

② 文法指導の工夫（コミュニケーションを重視した文法指導）

コミュニケーションを重視した文法指導を取り入れることで、生徒が目標文法事項に「気づき」意味のあるコミュニケーション活動をとおして「活用する」ことで理解・定着を図る。

2 コミュニケーションを重視した文法指導について

(1) 調査結果からの考察

中学生の語順に関わるアンケート分析・考察

高島（2007年）が行った公立中学校347名を対象にした「中学生の英語語順の習得状況調査」（平成15～18年）によると、SVOのみの単純な文型に後置修飾語や副詞句が加わるだけで、並べ替え問題（語順の問題）では、半数以下の正答率にとどまっていることが明らかになった。また、本校の新2年生（進級前3月）に英語検定5級程度の並べ替え問題を2クラス（71名）で行った結果、正答率が6割以下であった。このことは、学年が進むにつれて、難しくなっていく文法事項の中でも、語順という基礎的な部分でのつまずきが見られることを示している。語順も含め各文法事項においても従来と違う文法指導を試みる必要がある。

(2) 伝統的教師主導の文法指導とコミュニケーションを重視した文法指導法の比較・考察

和泉（2007年）が行った、伝統的な教師主導の文法導入・指導を行った場合とフォーカス・オン・フォーム（意味のあるコミュニケーション活動を重視した）を取り入れた文法導入・指導を行った場合との直後テストと遅延テストとを比較したデータによると、直後テストでは、両方とも定着度にさほど差はなかった。一方、遅延テストでは、教師主導型に比べて、フォーカス・オン・フォーム型ほうが定着度が高かったという結果を示した。そこで、教師と生徒間や生徒間の意味のあるコミュニケーション活動または、他の意味の伝達を重視した活動を継続的に行うことで文法項目の理解と定着が図られるのではないかと考えた。

(3) 新学習指導要領を受けての考察

インターネットなどIT環境の発達により、様々な分野において外国と接触する機会が増えてきている。特に、インターネットで情報を受け取り発信する力は、より安価で効果的に経済活動を進めていくためにも必要不可欠な能力となる。最近では、急速に広がった10億人の会員を要するフェイスブックなどのソーシャルネットワークサービス（SNS）を介して生まれたビジネスは数知れず、すでに数兆円のビジネス活動につながっているとされている。世界とつながりやすい環境が整ったと考えられる。そんな中、英語を使ってコミュニケーションを図る人材が求められ、その能力を身につけることが必要とされている。どんな活動をするにしても、簡単に世界に活動の幅を広げることができるのである。急速にボーダレス化する世界の中で、誰でも安価にメールやインターネットサイトなどを通じて外国語（英語）で情報を発信できる時代なのである。そこで、日本の英語教育も変革の時期を迎えているといっても過言ではない。新しい中学校学習指導要領も平成24年度に全面実施された。その改訂基本方針の1つに以下（表1）があげられる。

表1 中学校学習指導要領外国語科改訂の基本方針

「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したものとする事ができるよう、指導すべき語数を充実する。

このことから、4技能をバランスよく育成し統合的に活用できるコミュニケーション能力が求められている。特に、下線部で示されているように「その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、「文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。」」とうたっている。言語活動と文法指導の一体化、つまり、フォーカス・オン・フォームなどのコミュニケーションを重視した新しい文法指導を模索し検証する必要があることを示唆している。

(4) 第二言語習得の過程と伝統的な文法指導の比較からの新しい文法指導への提言

和泉（2012年）によると、SLA（第二言語習得）研究による第二言語の習得過程を大まかに捉えて、図1のように、まずインプットが必要であり、そこから学習者が必要な言語材料を取捨選択して取り込み、インテイク（intake）していく。それを更に、既習知識と統合・整理させ強固に脳内に内在化させることによって、学習者の中間言語システムが構築されていく。それを使って、アウトプットしていくと述べている。

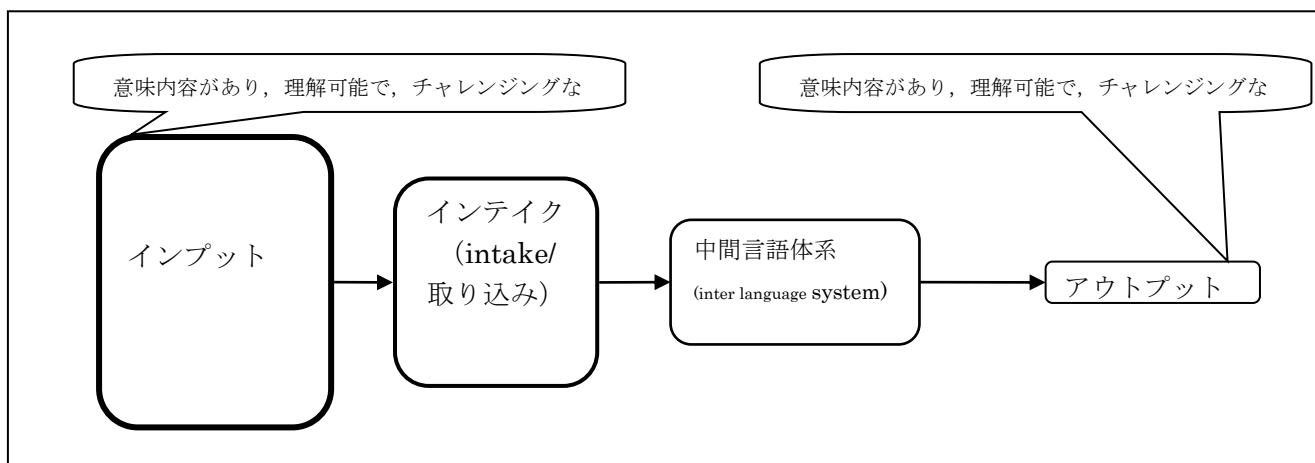


図1 第二言語習得の過程

これまでの伝統的な英語教育を図1に当てはめてみると、図2のようになる。そこでは、文法理解が最優先されるため、インプットよりも説明の方が多くなり、少ないインプットの扱いは、内容もコンテキスト（context）も乏しいものとなる。

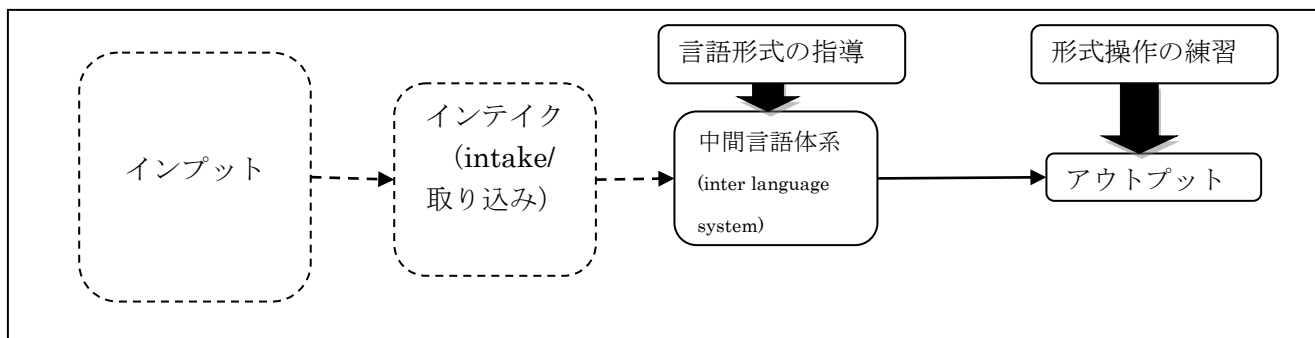


図2 インプット、インテイクを無視した教え込みの指導

文法を例示するためだけの英文を日本語で解説し、機械的な練習問題を与え、目標文法項目を使わせることだけを目的とした疑似アウトプット活動が行われたりする。つまり、第二言語習得で重要とされるインプット、インテイク、気づき、アウトプットなどの過程が実質的に全て無視されてしまうことになる。そこで、言語習得の概念と文法指導の役割を、**図2**のようなものから**図3**のように転換していく必要がある。つまり、どのような言語形式が、何の意味を伝えるために、どこで使われているのかといったことへの「気づき」「違いの気づき」「モニタリング（自らの発話の事前・事後チェック）」を促進すること、そのような「気づき」を触発するためには、多くの意味ある言語使用の機会（インプット、アウトプット、インタラクション）が欠かせない。授業を教師主導から、より生徒主体へと変えていく。つまり、教え込む文法指導から、ハッとした気づきを促す文法指導へと変えていく必要がある。これまで訳読や練習問題といった活動に費やしてきた時間の多くを、内容のあるコミュニケーション活動に使っていくようにしなければならない。（和泉:2012）

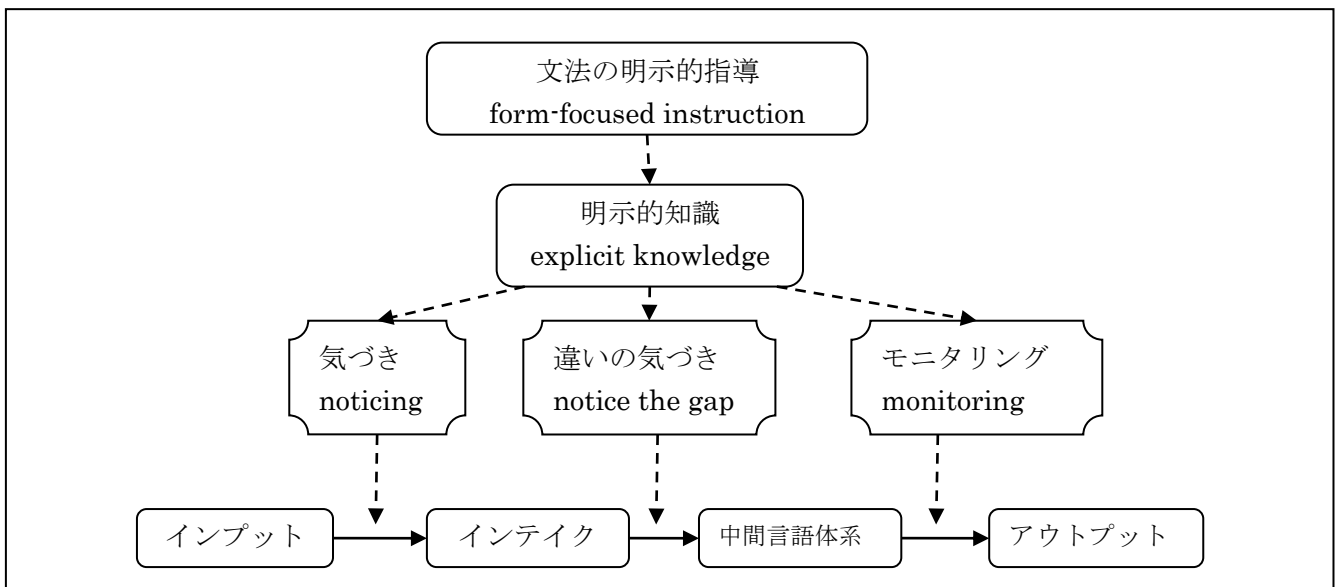


図3 第二言語習得過程における明示的な文法指学習の役割概念図

（R. Ellis, 1993, 1997, 2003, 2008 に基づく）

(5) フォーカス・オン・フォームを取り入れた文法指導の工夫

① 本研究でのフォーカス・オン・フォームの位置づけ

目標文法項目に焦点をあてた意味ある理解可能な言語活動（インプット）を通して、目標文法項目に「気づき」、同時に、それが何を意味していて、どういう場面で使われているのかといった「気づき」の機会も多く与えることで、理解を深め内在化していくことができる。更に、目標文法項目に焦点をあてた意味あるアウトプットをインタラクション（コミュニケーション活動を含む）の中で、多く使用させることで文法項目への定着が図られると考える。本研究では、**図4**で示すように、生徒の実態や単元の特性を考慮に入れて授業の中で、フォーカス・オン・フォームを取り入れる場所（タイミング）を柔軟に設定していく。

本研究では、フォーカス・オン・フォームを取り入れた文法指導が文法などの言語形式の定着に有効であるかどうかを検証する試みである。必要であれば、様々な手法も平行して取り入れていく。特に言語材料がまだ少なく英語での意思伝達が困難な中学校1学年を対象とした研究であるため、基礎的能力を培うため、反復練習も多く取り入れる必要がある。しかし、ここでフォーカス・オン・フォームの効果を最大限に引き出すために、あらゆる活動において「気づき」を促す活動になるように慎重に配慮する。

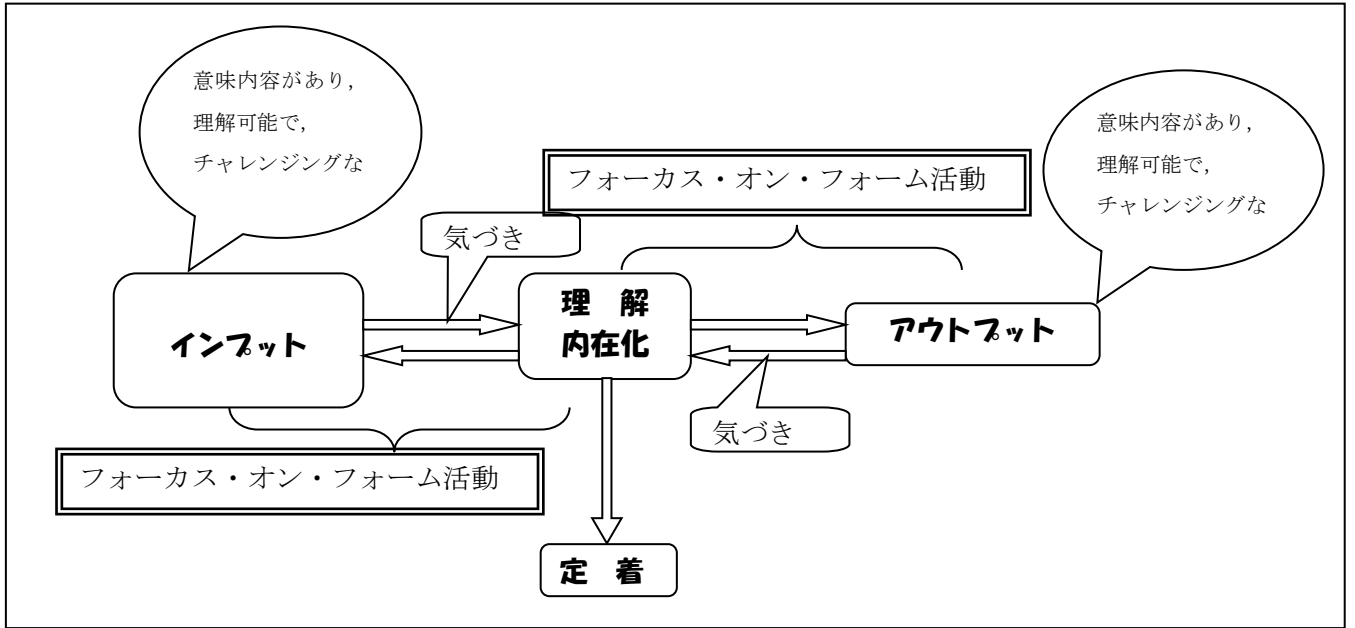


図4 文法項目フォーカス・オン・フォームを取り入れるタイミング

② 文法指導にフォーカス・オン・フォーム取り入れる具体的な手立て

目標文法項目に焦点をあてた意味のある理解可能なインプットをできるだけ多く提示し「気づき」を促す。その「気づき」（目標文法項目）を教師が補足し理解の助けとなる。適宜、聞く・読む・発話するなどの基礎能力を育むための練習の時間をとおして、目標文法項目の理解を促す。次に目標項目に焦点をあてた意味ある理解可能なアウトプットの機会を設け、目標文法項目を使用させることで、さらなる「気づき」を促し理解と定着を図る。このフォーカス・オン・フォームを取り入れる際に、形式だけの入れ替えの練習にならないように、意味や話者の意志を重視した伝達が行われる活動になっているか考慮に入れて活動や教材を計画・作成する必要がある。また、1学年の指導においては、読む・書く・聞く・話すなどの基礎的能力を定着させるための反復学習や機械的な練習の時間も授業の中に取り入れる必要もある。

インプットの例
 目標文法項目に焦点をあてた意味のある理解可能な
 ・デモンストレーションダイアログ
 ・リーディング活動
 ・リスニング活動
 ・インタラクション（コミュニケーション活動）

アウトプットの例
 目標文法項目に焦点をあてた意味のある理解可能な
 ・ライティング活動
 ・スピーキング活動
 ・インタラクション（コミュニケーション活動）

③ 本研究での『気づき』の授業・活動の概念について

本研究では、従来のコミュニケーション活動のようなパターンプラクティス（言語形式の反復練習）とは違い、生徒にとって、理解可能で、かつ、意思伝達をすることができるコミュニケーション活動や意味内容のあるデモンストレーションやリーディング活動を取り入れ、目標文法項目を含む英文・英単語にできるだけ何度も繰り返し触れさせることで、生徒自身が自発的に目標文法項目に気づき、教師の明示的な指導の助けを借りて、目標文法項目を自然な形で内在化していくことができるという理論をもとに研究を進める。その際、『気づき』とは、前述の活動をとおして目標文法項目に気づくことと定義する。

IV 検証授業

1 検証授業の指導

(1) 単元名 Lesson 2 Pets and Hobbies 先生に聞いてみよう (Total English New edition 1)

(2) 単元の考察

- ① 生徒の実態 (省略)
- ② 単元観 (省略)
- ③ 指導観

生徒は小学校外国語活動で、数字を活用して英語の音やリズムに慣れ親しむ活動を体験してきている。本単元ではその体験を活かして、前単元名 Word Tree (数字)で学習した1~100までの数を活用しつつ、複数形のs/esおよび単数の冠詞a/anの目標文法項目に『気づき』、数字と名詞の関係の理解を深めることをねらいとする。また、How many ~s?の数を尋ねる表現とその答え方にも『気づき』、理解を深め、それを活用した複数形と単数形の表現活動(アウトプット)を通して、目標文法項目(複数形と単数形)についての定着を図る。

その導入の際には、できるだけ多くのスキットやコミュニケーション活動を通して、生徒たちの『気づき』を促すように配慮する。また、単元全体をフォーカス・オン・フォーム(『気づき』・理解・『気づき』の活用による定着)ととらえて授業計画を作成する。学習した単語や文法項目に何度も触れさせることで『気づき』・理解・定着をより確かなものにすると考えられる。

(3) 指導目標

- ① 目標文法項目を導入するときの『気づき』の活動に積極的に取り組むことができる。
(A コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ② 活動を通して目標文法項目に自ら『気づき』、その内容を理解することができる。
(C 理解の能力)
- ③ 『気づき』(目標文法項目)正しく活用して表現活動に取り組むことができる。
(B 表現の能力)
- ④ a/anの冠詞の使い方や複数形のs/esの作り方などを理解し、正しく活用することができる。
(D 言語や文化についての知識・理解)

(4) 評価規準

	A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 表現の能力	C 理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
聞く	A① 教師の対話や話を興味をもって聞けることができる。		C① 聞いた内容について正しく聞き取ることができ、目標文法項目に気づくことができる。	D① 単数形のa/anの使い方を気づき、理解している。
話す	A② 間違いを恐れず積極的に英語を話すことができる。	B① 今まで習った単語や目標文法項目を含む表現を使って話すことができる。	C② 聞いた内容について目標文法項目を活用して正しく応答することができる。	D② 複数形にはs/esがつくことを理解し、その作り方を習得している。
読む	A③ 本文を声に出して読むことができる。		C③ 本文の内容について目標文法項目を意識しながら正しく読み取ることができる。	D③ How many~?とその答え方を理解し習得している。
書く	A④ 目標文法項目を含む英文を間違いを恐れず作成する。	B② 伝えたい内容を目標文法項目を含む表現を使って書くことができる。	C④ 伝えたい内容を目標文法項目を含む表現を活用して文章を構成することができる。	

(5) 指導と評価の計画

	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法
第1時	<ul style="list-style-type: none"> 数字の定着 (1~25) 新出単語を理解 音 (フォニックス)を理解 	<ul style="list-style-type: none"> 1~25 までの数字を何度も繰り返し聞きたり言ったりする。 辞書で単語を調べる。 	A②	<ul style="list-style-type: none"> 活動の観察/生徒の応答 自己評価カード
第2時	<ul style="list-style-type: none"> 数字の定着 (26~50) 新出単語の定着 	<ul style="list-style-type: none"> 26~50 までの数字を何度も繰り返し聞きたり言ったりする。 英単語テスト (英単語スキル)のやり方がわかる。 	A②	<ul style="list-style-type: none"> 活動の観察/生徒の応答 テスト 自己評価カード
第3時	<ul style="list-style-type: none"> 名詞の複数形に s/es がつくことを理解 新出単語の定着 数字の定着 (51~75) 	<ul style="list-style-type: none"> 聞いた内容を理解し、複数形の s/es への『気づき』(目標文法項目) 英単語テスト①実施。 51~75 までの数字を何度も繰り返し反復練習する。 	C② A②	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 テスト 自己評価カード
第4時	<ul style="list-style-type: none"> 名詞の複数形の定着 名詞の複数形の作り方 名詞の複数形を使った活動で定着 	<ul style="list-style-type: none"> 複数形の s/es の発音の違いを知る。 複数形の s/es の作り方を知る。 聞いた内容を理解する。 	D② D② C①	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 自己評価カード
第5時	<ul style="list-style-type: none"> 単数名詞の冠詞 a/an を理解 新出単語の定着 	<ul style="list-style-type: none"> 聞いた内容を理解し、単数形の a/an への『気づき』(目標文法項目)。 英単語テスト②実施。 	C①	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 テスト 自己評価カード
第6時	<ul style="list-style-type: none"> a/an を使った活動で単数名詞の冠詞 a/an の定着 新出単語の定着 	<ul style="list-style-type: none"> a/an の使い方の違い理解し区別する。 英単語テスト③実施。 	D②	<ul style="list-style-type: none"> 活動の観察/生徒の応答 テスト 自己評価カード
第7時	<ul style="list-style-type: none"> how many~?とその答え方を理解 新出単語の理解 	<ul style="list-style-type: none"> 聞いた内容を理解し、how many~?とその答え方への『気づき』(目標文法項目)。 	C③	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 自己評価カード
第8時	<ul style="list-style-type: none"> how many~?とその答え方の定着 新出単語の定着 	<ul style="list-style-type: none"> how many~?とその答え方を活用して英語で文を書く。 新出単語練習。 	A④ B④	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 自己評価カード
第9時(本時)	<ul style="list-style-type: none"> how many~?とその答え方の定着 新出単語の定着 	<ul style="list-style-type: none"> how many~?とその答え方を活用したコミュニケーション活動。 英単語テスト④実施。 	C①②③ A②	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート 活動の観察/生徒の応答 自己評価カード
第10時	<ul style="list-style-type: none"> Lesson2 のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 練習問題 (ワーク活用)。 アンケート実施。 直後テスト (複数・a/an)実施。 	C①②③	<ul style="list-style-type: none"> アンケート テスト 自己評価カード

(6) 本時の学習

① 学習目標

冠詞 a/an, 複数形の s/es, How many ~ do you have? とその答え方 I have ~. を活用することができる。

② 授業仮説

意味内容のある活動を通して得た『気づき』(目標文法項目)を用いて、さらに意味内容のある活動に取り組むことで『気づき』(目標文法項目)の定着が図れるであろう。

③ 言語材料

冠詞 (a/an), 複数形 (s/es), 一般動詞 (have), 疑問詞 (how many~?)




④ 評価の観点と具体的な評価規準

評価の観点	評価場面	具体的な評価規準		
		A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手立て
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	観察 自己評価カード	自らすすんで活動に取り組んでいる。	促されて発表や活動に取り組んでいる。	単語の意味、発音を確認させる。
表現の能力	ペア活動やアクティビティでの応答	既習の『気づき』複数形 s/es, 単数冠詞 a/an をいくつも使い活動している。	既習の『気づき』複数形 s/es, 単数冠詞 a/an を使おうと努力して活動している。	how many~? と I have~. の使い方を確認させる。
理解の能力	テスト アクティビティ	冠詞 a/an や複数形を区別し活用できる。	冠詞 a/an や複数形をおおむね区別し活用できる。	冠詞 a/an や複数形の区別を確認させる。
言語や文化についての知識・理解	テスト ワークシート	確認テストで 80% 以上。	確認テスト 70~79% 以内。	複数形・単数形を作り方を確認させる。

⑤ 展開

(T1:主となる指導教諭 T2:副指導教諭)

過程	学習内容・学習の流れ	評価	留意点
導入 15分	あいさつ めあてを確認する。 How many~? を使って友達のカバンの中身を知ろう。 ① 今月の歌 ② 新出単語の練習 T2 ③ 英単語スキル T1 ・テストを行う。 ④ 既習事項を確認する。T2 a ruler → rulers a notebook → notebooks a pen → pens an eraser → erasers a pencil → pencils	① 楽しく歌っているか。 ② 英単語を積極的に発音しているか。 A②[話す] ③ 英単語を積極的に発音・練習しているか。 B②[書く] ④ 『気づき』(文法項目)を発音しているか。 B②[書く]・C②[話す]	・自己評価カードを記入させる。 ① 教師も一緒に歌う。 ② フラッシュカードで再度意味・発音を確認させる。 ③ 机間巡視して発音しながら書くよう促す。 a/an, 複数形の s/es を再確認する。 ④ a/an, 複数形の s/es を強調して発音し意識させる。

過程	学習内容・学習の流れ	評価	留意点
展開 32分 ①8分	① ペアワークの説明を実施。 T1T2 でデモンストレーションを 行いながらワークの説明を聞く。 T2: How many pens do you have? T1: I have 3 pens. T2: How many pencils do you have? T1: I have 3 pencils. T2 :How many erasers do you have? T1 :I have an eraser.	① 聞いた内容を理解して いるか。C①[聞く] 	① ワークシートの記入の し方を黒板で提示する。
②5分	② 前時(第8時)の自己表現を復習 する。 ・複数形の s/es と単数冠詞 a/an をしっかり発音する。 ・Aペア【男女】で練習する。 Bペア【男男】【女女】で練習 する。	② 複数形 s/es 単数冠詞 a/an を発音して いるか。A②[話す] 	② 質問の発話練習もしつ かり行わせる。
③8分	③ ペアワークをはじめる。 ・互いに質問しあいワークシート に情報を書き込む。 ・3人と質問しあったら、T1T2 のところで確認を受けポイント をもらう。 ・終わった人は、スーパーマッキ ーノの準備をする。	③ ワークシートにしま り、複数形・a/an 単数が かけているか B②[書く] ・積極的に取り組んでい るか。A②[話す] ・複数形・単数形をし っかり発音しているか。 B①[話す]	③ 机間巡視をして個別指 導をする。 ・英語を使うように促す。 ・机間巡視をし、複数形・ a/an 単数になっていか確 認する。
④3分	④ 教師のアクティビティの振り 返り評価を与える。	④ 生徒が積極的に参加し ているか。A②[話す] 	④ 生徒から a/an, 複数形 の s/es の『気づき』が出 てくるように促す。
⑤8分	⑤ スーパーマッキーノ(数字ビンゴ) を行う。	⑤ 数字を発音している か。 B①[話す]	⑤ 数字を必ず発音するよ う促す。
まとめ 3分	① 自己評価の記入と学級評価 ② 次時の学習内容を知る。	① 自己評価カードをし っかり記入しているかど うか。 ② 課題を達成することが できか。	① 理解できていない箇所 を確認させ、次時の学習に つなげる。

⑥ 本時の評価

検証授業の3・5・7時のフォーカス・オン・フォーム活動での『気づき』を通して理解した目標文法項目を意識しながら相手に質問したり、質問に答えたりすることができたか。また、目標文法項目（冠詞 a/an, 複数形の s/es）に注意しながら、ワークシートを記入することができたか。

2 授業仮説の検証

本時の授業仮説について、生徒がペアワーク活動で使用したワークシートを基に考察を行う。

(1) 『気づき』目標文法項目を意識して積極的に相手に質問したり質問に答えたりすることができたか。

本時のペアワークでは、相手のカバンの中身（文房具）の数を質問し、それに答えてもらい、目標文法項目（冠詞 a/an, 複数形の s/es How many ~s do you have? とその答え方）を活用し定着を図るという意味のあるコミュニケーション活動である。活動を行う際、目標文法項目の理解を確認するためのワークシートを準備し、記入させながら活動を行わせた。書く活動を取り入れたことで、生徒たちが目標文法項目を意識して発話するようになった。このことから、ワークシートとコミュニケーション活動を効果的に組み合わせることによって目標文法項目の理解・定着に有効であると考えられる。

(2) 『気づき』目標文法項目を意識して活動に取り組むことができたか。

資料1は生徒がペアワーク活動中に記入したワークシートである。目標文法項目の冠詞 a/an, 複数形の s/es が、しっかりと記入されている。このことから、生徒たちは活動中も目標文法項目を意識しながら、活動していることが伺える。また、細かな a と an の区別がつけられない生徒も多くいることから、これまで、『気づき』の活動に重点を置いて授業を進めてきたため、定着を図るための時間をとることができなかったためだと考えられる。しかし、ほとんどの生徒が複数形の時は s/es を名詞の後につけることや単数名詞の前に a/an をつけることは理解していることがわかる。このことから、フォーカス・オン・フォーム活動『気づき』の授業を通じた目標文法項目の理解はおおむね達成されていると考えられる。

	A ペア練習	B ペア練習	本番		
Names	川上か	川上こ	あかり	のり	川上村
pen	a pen	3 pens	2 pens	2 pens	2 pens
eraser	2 erasers	an eraser	3 erasers	2 erasers	3 erasers
ruler	2 rulers	a ruler	2 rulers	3 rulers	2 rulers

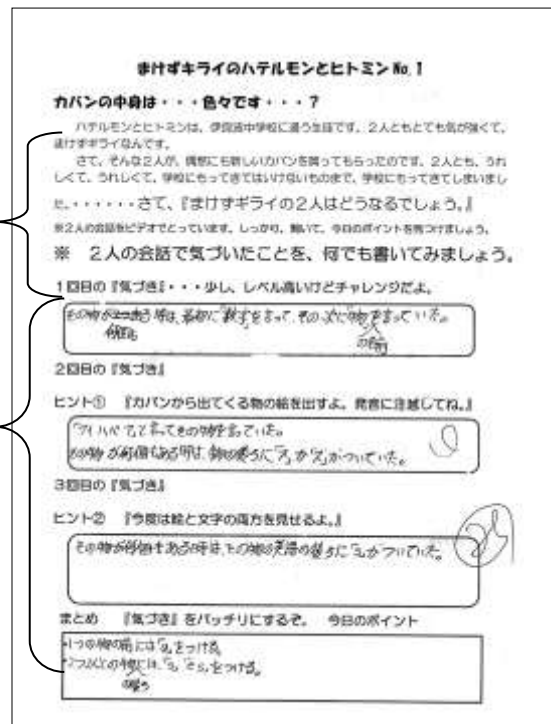
	A ペア練習	B ペア練習	本番		
Names	せな	えいた	ふた	ふた	ふた
pen		3 pens	2 pens	3 pens	4 pen
eraser		an eraser	2 erasers	an eraser	2 erasers
ruler		3 rulers	3 rulers	3 rulers	2 rulers

資料1 生徒のワークシート

V 研究の結果と考察

1 フォーカス・オン・フォーム『気づき』の授業を通した文法指導の工夫について

新しい文法項目を導入する際、従来の授業では、教師が基本文を提示し訳読式で細かな文法項目の説明を行うことが多かったが、本研究では、『気づき』の授業をとおして、生徒に目標文法項目を含む英文・英単語にできるだけ多く触れてもらうことで、生徒の自発的な目標文法項目への『気づき』を促すことに配慮した。その際、自然なかたちで目標文法項目に気づかせるために、生徒が繰り返し目標文法項目を含む英文・英単語に接することができるようワークシートを工夫した(資料2)。また、生徒が英語の内容を聞き取ろうとする過程で、目標文法項目への『気づき』を自然に行えるように、細かな場面設定にも配慮した(資料2①)。生徒たちの『気づき』の活動へのハードルを下げるために、今回のワークシートでは3回の『気づき』の機会を含めた。1回の『気づき』は、聞き取りのみによる『気づき』、2回目は、ピクチャーカードも一緒に聞き取り、3回目は、ピクチャーカードと聞き取りに加えて文字も提示した(資料2②)。その結果、34人中、32人が目標文法項目に気づくことができた。このことから、文法項目導入の活動を工夫することができれば、生徒自らの目標文法項目への『気づき』は可能であると考えられる。



資料2 『気づき』のワークシート

生徒自らの目標文法項目への『気づき』は可能

2 フォーカス・オン・フォーム『気づき』の授業による目標文法項目の理解と定着について

授業後のアンケート結果(図5)を見ると、目標文法項目を「気づくことができた」と答えた生徒が94%(34人中32人)とほとんどであった。また、『気づき』の授業がわかりやすかったですか。という質問項目に対しても同様に94%がわかりやすかったと答えている(図6)。このことは、生徒たちが小学校で得た知識や技能を活用して自ら目標文法項目を発見するという『気づき』の授業を肯定的にとらえていると考えられる。資料3は生徒たちの『気づき』の過程を示している。1回目、2回目、3回目と『気づき』が深まっていく様子が見える。3回目になるとほとんどの生徒が複数形のs/esに気づくことができています。このことから、繰り返し何度も、多くの英文・英単語に触れさせることは、目標文法項目の『気づき』に有効であると考えられる。つまり、綿密に計画された『気づき』の活動を通して、生徒の本来持っている言語習得の能力を意図的に引き出すことができ

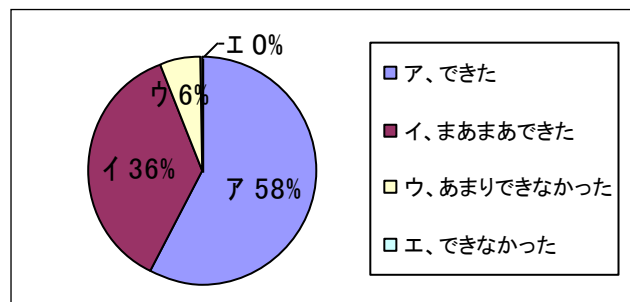


図5 『気づき』の授業で目標文法項目に気づくことができたか

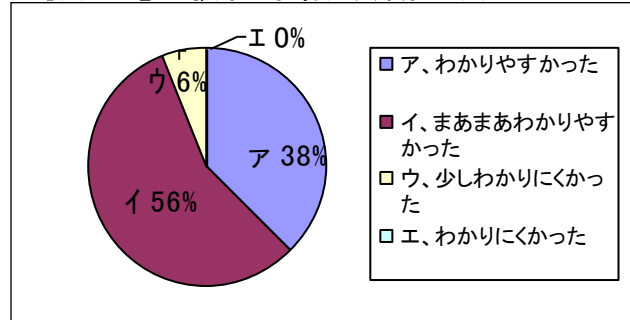


図6 『気づき』の授業はわかりやすかったか

『気づき』の活動を通して、生徒の本来持っている言語習得の能力を意図的に引き出すことができ

いると考えられる。

1回目の『気づき』・・・少し、レベル高いけどチャレンジだよ。

何枚と、1個 (中何枚) (何が) 人がいたのが、書かれました。

2回目の『気づき』

ヒント① 『カバンから出てくる物の絵を出すよ。発音に注意してね。』

1個以上のものは、スがついていた。 (ス) エと書いていたものもあつた。(最初)

3回目の『気づき』

ヒント② 『今度は絵と文字の両方を見せるよ。』

1回のは、最後にスがついていなかったけど、2以上のものはスがついていた。

1回目の『気づき』・・・少し、レベル高いけどチャレンジだよ。

その物が2個ある時は、最初に数字を書いて、その次に物を書いていた。 (何枚) (何個)

2回目の『気づき』

ヒント① 『カバンから出てくる物の絵を出すよ。発音に注意してね。』

「アリハバ」と書いてその物を書いていた。 (何枚) (何個) 物の後ろにスがついていた。

3回目の『気づき』

ヒント② 『今度は絵と文字の両方を見せるよ。』

その物が何個もある時は、その物の英語の後ろにスがついていた。



1回目の『気づき』・・・少し、レベル高いけどチャレンジだよ。

持っている物をさう前に、 (何枚) (何個) 1個以上持っていたら数字を言ったあとに、持っている物と言っていた。

2回目の『気づき』

ヒント① 『カバンから出てくる物の絵を出すよ。発音に注意してね。』

1個持っている時は、I have a+で書いていたけど、 (何枚) (何個) 1個以上持っている時は、単語のあとにsと書いていた。

3回目の『気づき』

ヒント② 『今度は絵と文字の両方を見せるよ。』

2個以上持っていたら、 (何枚) (何個) 最後スがついていました。

資料3 『気づき』の発表の様子と生徒の『気づき』の過程

3 フォーカス・オン・フォーム『気づき』の授業と小学校外国語活動からの段階的連結について

今回検証する学級2クラスについて、中学校入学直後（4月初旬）に小学校外国語活動についてのアンケートと検証授業後（7月初旬）に中学校英語についてのアンケートを行った。「英語の勉強は好きですか」という問いに対して、4月初旬の結果によると、28%の生徒が「好きではない」と答えていた（図7）。

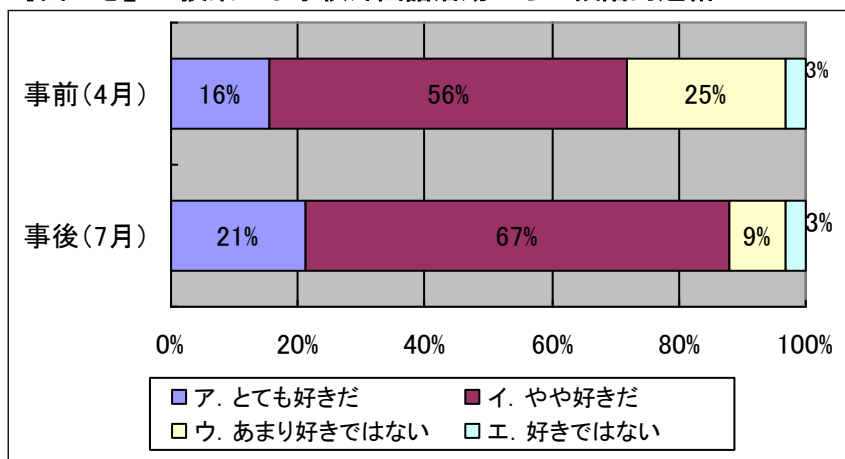


図7 英語の勉強は好きですか。

そこで、コミュニケーション活動を重視した文法指導の試みとしてフォーカス・オン・フォームを取り入れた文法指導に取り組んでいった。6月から7月初旬まで継続して取り組んだ結果、検証授業後7月初旬のアンケートによると、英語の学習が「好きだ」と答えた生徒が4月初旬の72%から92%と20%増加した（図7）。このことは、生徒たちの英語学習に対する情意面の意識も向上

していることを示している。また、フォーカス・オン・フォームの活動と並行して、楽しさを味わえるように、ポイント制の導入、数種類のビンゴ活動など、授業の中に、チャレンジングでかつ楽しい活動を組み込むように努めた。

その結果、検証授業後7月初旬のアンケートでは、「英語の学習は楽しいですか」の問いに対して、94%の生徒が、「楽しい」と答えた(図8)。このことから、小学校外国語活動から中学校英語へ段階的連結がうまく図られたと考えられる。

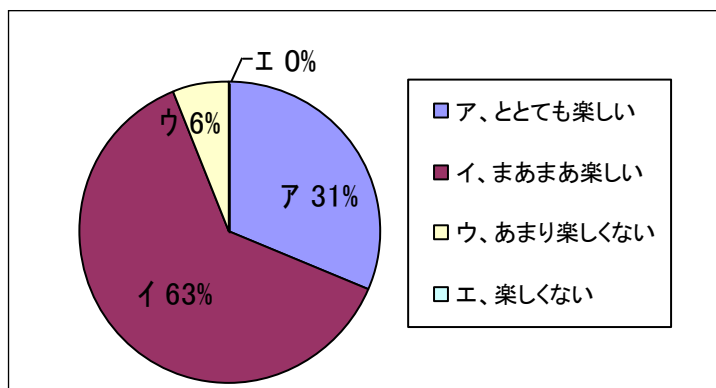


図8 英語の学習は楽しいですか

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) フォーカス・オン・フォーム『気づき』の活動を通して生徒自ら目標文法項目に気づくことができた(V-1)。
- (2) フォーカス・オン・フォーム『気づき』の活動を通じた文法指導は生徒の知的欲求と生徒の本来もっている言語習得能力を引出すことができたことから、目標文法項目の理解に有効であると考えられる(V-2)。
- (3) 生徒自ら文法項目に気づくというフォーカス・オン・フォームの考え方をを用いた活動は生徒のコミュニケーションの楽しさや積極性を促進しつつ、かつ知的欲求を刺激し興味・関心を喚起することから、小学校外国語活動と中学校英語への段階的連結に有効であると考えられる(V-3)。

2 研究の課題

- (1) 言語材料や知識の少ない中学校英語導入期におけるフォーカス・オン・フォームの活動を作り出すことは難しく生徒の理解を助けるために、ピクチャーカードや実物など様々な教材教具を準備するための時間が必要である。
- (2) フォーカス・オン・フォーム活動と定着のための繰り返し学習の両方を用いた学習計画の工夫が必要である。
- (3) 実験群2クラスと統制群2クラスによる直後・遅延テストの分析・考察は、遅延テスト9月実施後に行う予定である。引き続き継続しフォーカス・オン・フォームの文法指導法の有効性を確認する必要がある。

<主な参考文献>

- | | | |
|--|-------|-------|
| 滝沢広人著 『生徒にゲットさせたい“英語の学習スキル”－入門期の指導ステップー』 | 明治図書 | 2009年 |
| 高島英幸著 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 | 大修館書店 | 2011年 |
| 和泉伸一著 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 | 大修館書店 | 2012年 |
| 武田千代城著 『英単語が必ず読めるようになる。驚異のフォニックスワーク 35』 | 明治図書 | 2012年 |
| 滝沢広人著 『中学校の英文法！楽しい導入アクティビティ・アイディア集』 | 明治図書 | 2013年 |
| 滝沢広人著 『中学校1年の英語授業をリズムとテンポでカッコよくする50の方法』 | 明治図書 | 2013年 |